

西の菜時記

平成28年6月30日発行
第41号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

特集：山口大神宮の見どころ

◆山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360◆

参加者から「伊勢参りのように、山口でも参道に出店が並んだり、宿場町が賑わったりしたんですか」という質問がありました。大内義興は大変真面目な人で、義興本人が伊勢参りするとき、その参拝の作法を入念に練習して臨んだというような記録が残っているそうです。というわけで、気持ちを静めて厳かに参るといふ風潮が山口にはあったのではないかと思います。うお話でした。大胆かつ誠実な義興の人柄が浮かび上がってきます。

大内義興ってどんな人？

將軍を凌ぐ勢力を誇っていました。また、石見銀山も大内氏の庇護のもとに栄え、博多は日明貿易で活発な経済活動を産んでいました。一度の貿易で推定54億円の利益をあげていたということですから、スーパーセレブだったということになります。山口大神宮はその資金で創建されたということですから、時を超えて室町時代の人々と繋がることのできるロマン溢れる場所だと思えました。



山口大神宮権禰宜 松田年通氏

由緒正しさが証明されるのは、三点。一、伊勢神宮から勧請することを当時の天皇から許されたという署名が残されている。二、分霊しましたという記録が伊勢神宮に残っている。三、伊勢神宮から分霊をうけた内宮、外宮がある社は西日本でも希なことである。など。

6月25日(土)菜香亭大広間にて、山口大神宮権禰宜 松田年通氏の講演会を開催しました。山口大神宮は、「西のお伊勢さん」と言われていますが、今回の講演で日本一由緒正しい神社であり、創建した大内義興の勢力がいかに絶大であったかを物語る歴史的建造物だということがよくわかりました。

山口大神宮の歴史

大内文化の時代から幕末維新を経て

幕末の志士たちも伊勢参り

大内氏の進取の気風と視野の広さは、毛利の時代にも受け継がれました。幕末、新しい時代を見据えて戦ったことも大内時代の進取の気風に培われていたかもしれません。

山口大神宮には戦勝祈願のために毛利の殿様をはじめ、七卿の公家や奇兵隊などの諸隊も訪れました。神霊の宿るこのお宮は人々を見守り、信奉を集めてきました。

発見されれば大ニュース！

昭和46年の豪雨災害のとき、鴻ノ嶺に土砂崩れが起こりました。その下敷きになったかがみ岩は今でも発見されていません。ただ、そのかがみ岩のおかげで土砂が社殿に及ばず止まったという話があります。

遷宮のあとの古材はどこへ？

平成8年内宮が火災に見舞われたことをきっかけに遷宮が行われました。出雲大社は60年おきですが、伊勢神宮は20年なので用材がもったいないという話もあります。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、その用材はまた磨きをかけて、全国の神社の再建や補修につかわれているそうです。東日本大震災で被災した神社に再利用されたり、近いところでは下関の厳島神社の社殿にも使われているそうです。ご利益がありそうですね。



山口大神宮に祇園社(八坂神社)があるので、文久3年(1862年)より以前の古地図。(山口県文書館所蔵)



菜香亭の大広間がいっぱいに…。関心が高いです。

◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

＜市民ギャラリー出展作品の紹介＞

ひろまり絵画教室展～創造性豊かな山口の子どもたち～
—ひろまり絵画教室— 6/11～6/12



出展ご希望の方は、
2ヶ月前までにお申し出ください。

※ご利用について内面に詳しく掲載しています。

(お問い合わせ)

TEL : 083-934-3312

FAX : 083-934-3360

＜平成28年度 市民ギャラリーの予定＞7・8・9月

月日	時間	タイトル	主催者
8/25 ～28	9時～17時(最終日のみ16時まで)	第3回 ふたりっこ制作展 in 山口	向田秀敏 向田美保
9/8 ～10	9時～17時(最終日のみ16時まで)	カメラ片手に漫ろ歩き ～山口市シルバー人材センター パソコン班写真展～	山口市シルバー人材センター パソコン班

菜香亭界限史跡めぐり

萩往還の上堅小路を下って、大内氏時代「唐人小路」と言われた小路を右に曲がって一の坂川と交差する橋のたもとに、「錦の御旗制作所跡」の小さな石碑と看板があります。

慶応3年(1867年)討幕の密勅が薩長両藩に下り、これと同時に岩倉具視は大久保利通、品川弥二郎と会見した際、錦旗の制作の調整を行ったと言われています。

大久保利通は京都西陣で大和錦と紅白の緞子を調達し、半分を京都薩摩藩邸で密造させ、もう半分は品川弥二郎が山口に持ち帰り、藩の有識家(朝廷や公家等の礼式等に通暁している)である岡吉春に制作を依頼しました。

岡は一の坂川の畔にあった藩の養蚕所を錦の御旗制作所として約30日の苦勞に末、日章旗・月章旗各1旗と菊花章の紅白旗10旗を完成させました。

この小さな養蚕所で製作された錦の御旗が、慶応4年(1868年)4月、鳥羽伏見の戦いを始めその後の戊辰戦争の各地の戦いで薩長両軍を中心に使用され、官軍の証である錦旗の存在は士気を大いに鼓舞するとともに、賊軍の立場とされた幕府側に大きな打撃を与えました。

この錦旗を見たり、噂を聞いた幕府軍は、朝敵となることを恐れて戦意を喪失したと言われています。



錦旗余片額(山口県立山口博物館所蔵)
当時のものが所蔵されている。

山口市一の坂側の畔にある小さな石碑が、戊辰戦争における長州藩を勝利に導く礎ともなった錦旗を秘かに作成した跡を静かに物語っています。

又、余談ですが同じ品川弥二郎と錦旗に関して、日本初の軍歌とも言われている「宮さん宮さん」でお馴染みの「トコトンヤレ節」は、確証はないが作詞は品川弥二郎とされています。



一の坂川沿いにある錦の御旗制作所跡